

Contents

- 1 大学博物館等協議会 2013 年度 大会・第 8 回博物科学会開催報告
宮崎大学農学部附属農業博物館 館長 宇田津 徹朗
- 3 北海道大学ミュージアムマイスター認定コース 7 年目の展開
北海道大学総合博物館 准教授 湯浅万紀子
- 5 大学博物館を活用した教育プログラム「一日山大生になろう！」について
山形大学附属博物館 学芸研究員 佐藤 琴
- 7 大阪大学総合学術博物館における学芸員養成の取り組み
大阪大学総合学術博物館 特任講師 松永和浩
- 10 標本収蔵室での眠りからさめたクニマス ―大学で学術標本を持ち続けることの大切さ―
京都大学総合博物館 教授 中坊徹次
- 12 大学博物館等協議会加盟館の活動状況
北海道大学総合博物館 東北大学総合学術博物館 新潟大学旭町学術資料展示館
金沢大学資料館 東京藝術大学大学美術館 大阪大学総合学術博物館 国立民族学博物館
愛媛大学ミュージアム 鹿児島大学総合研究博物館

大学博物館等協議会 2013 年度 大会・ 第 8 回博物科学会開催報告

宮崎大学農学部附属農業博物館
館長 宇田津 徹朗

大学博物館等協議会 2013 年度大会および第 8 回日本博物科学会が 2013 年 5 月 30 日（木）・31 日（金）に、宮崎大学附属図書館で開催された。参加館は 30 館（加盟館 27 館、オブザーバー 3 館）で、参加人数 89 名であった。

初日の協議会では、実行委員長（宇田津）の挨拶に始まり、開催校である宮崎大学の菅

沼龍夫学長より「大学の教育研究および地域連携活動における大学博物館の活躍に期待する」との挨拶の後、文部科学省研究振興局学術機関課の高橋亮係長より、「学術研究を取り巻く動向」について紹介をいただいた。

続いて、協議会シンポジウム「大学の教育研究と博物館活動との連携―その実質化の取組―」へ移り、委員長からの主旨説明の後、宮崎大学農学部獣医学科の保田昌宏准教授より、「プラスティネーション標本を用いた獣医



会場入り口



会場の様子



宮崎大学附属農業博物館

解剖学教育～標本は学生を満足させられるか～」と題する特別講演が行われ、標本の大学の専門教育への活用における現状と課題等について紹介がなされた。講演の後、北海道大学、山形大学、大阪大学からも学芸員養成を含め、博物館として大学の教育研究における具体的な連携の取組事例を報告いただくとともに、参加者による討議・意見交換が行われた。

シンポジウム終了後は、会場3Fロビーで博物学会のポスター発表（13本）が実施され、活発な質疑・意見交換が展開された。

午後4時20分からは館長会議・実務者会議が行われ、両会議終了後引き続き協議会総会と博物学会総会が開催された。総会では、2012年度決算と監査報告および2013年度予算案が承認された。また、2013年度からの会長校が鹿児島大学、副会長校が大阪大学となること、協議会の入退会状況（入会：東京工業大学、弘前大学資料館、退会：宇都宮大学博物館（仮称）設置準備委員会）並びに次期協議会の開催校が愛媛大学となることが館長会議で了承されたことが報告された。加えて、実務者会議で、東京藝術大学大学美術館の薩摩教授から、全国の大学博物館に収蔵されている研究用スケッチを集めた展示が提案され、了承されたこと、その後、同教授より「大学博物館巡回展」をも視野に入れた企画案をまとめ、具体化へ向けて議論したい旨の発言があったことが報告された。博物学会総会では新会長の鹿児島大学山根館長の進行の下で、7名の学会入会が了承された。なお、これら会議・総会の議事録は、後日、協議会HPに公開されている。

総会終了後、懇親会が宮崎大学生協食堂で開催された。懇親会は、本館が属する農学部の上村昇学部長の挨拶と今回の協議会・科学



ポスター発表の様子

会の開催にご尽力いただいた前館長的那須哲夫教授の乾杯で始まり、宮崎牛、チキン南蛮ならびに完熟マンゴーなど「宮崎のうまいもの」を肴に、大学からの最終バスまで参加者の歓談が続く盛会となった。

2日目は、博物学会が9時から開催され、昼食時間のポスター発表の時間をはさみ、「地域と社会連携」、「情報」、「研究」、「展示」の4つの分野について合計15本の研究発表と熱心な質疑応答が行われた後、午後3時すぎに散会となった。

このように、宮崎大学での協議会と科学会が盛会のうちに無事終了することができたのは、名古屋大学の吉田会長をはじめ、多くの加盟館の教職員のみなさまのお力添えによるものである。特に、宮崎は大学から宿泊先の市街地や空港および駅への交通が不便なこともあり、今回は学会開催経費により散会后、参加者を空港と駅までお送りするバスを運行させていただいた。関係各位のご配慮に感謝申し上げます。

最後に、遠方の宮崎までお運びいただきました本協議会・科学会参加者の皆さまと関係者の各位へお礼を申し上げ、開催報告とさせていただきます。



懇親会の様子

北海道大学ミュージアムマイスター認定コース 7年目の展開

北海道大学総合博物館 准教授 湯浅万紀子

北海道大学総合博物館では、博物館の資源を活かした教育システム「ミュージアムマイスター認定コース」を展開している。このコースは、文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」（教育 GP）に平成 20 年度に採択された北海道大学「博物館舞台とした体験型全人教育の推進」プロジェクトを継承している。学芸員養成課程とは異なる博物館教育のユニークな取り組みとして、国内外の大学や博物館からヒアリングを受ける機会も多く、さまざまな場で発表する機会を得て、多くの方と意見交換を重ねてきた。そこで、本論ではコースの枠組みを改めて概説した上で、これまでの取り組みの意義と課題をまとめ、7年目を迎えたコースの展望を述べる。

ミュージアムマイスター認定コースの枠組み

ミュージアムマイスター認定コースでは、北海道大学が目指す全人教育の一環として、課題探求能力とコミュニケーション能力、マネジメント能力、自己評価能力を身につけた学生を育てることを目指している。分類学や資料学、博物館学の研究者や学芸員の養成に特化したコースではない。博物館に関連した授業と授業枠外のプロジェクト科目を、導入科目、ステップアップ科目、社会体験型科目という3つの科目群に位置付けている。導入科目は、学芸員養成課程の科目を中心に、博物館に関する基礎知識を身に付ける授業から成る。ステップアップ科目は、フィールドワークなど調査研究の方法論を学ぶ授業、美術館や水族館などの現場を知る授業、パラタクソノミスト（準分類学者）養成講座から成る。社会体験型科目は、北大総合博物館と社会とのコミュニケーションについて実践的に学ぶ授業と、授業枠外のプロジェクトから成る。科目は拡充されており、平成 26 年度は 43 件の授業と 4 件のプロジェクト、20 回程度のパラタクソノミスト養成講座が開講される。授業枠外のプロジェクトもコースに位置づけて

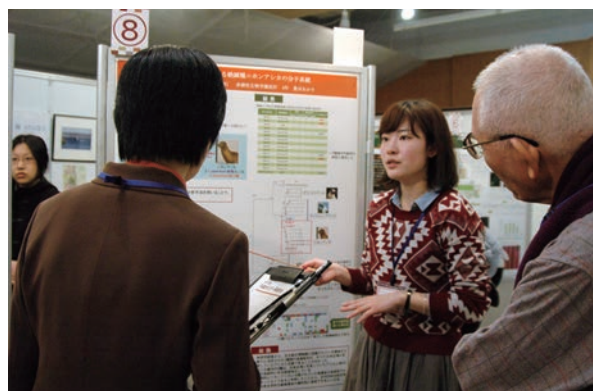
いるため、成績認定について「単位」ではなく「クレジット」という考え方を導入している。授業枠内の科目は授業単位と同数のクレジットを、授業枠外のプロジェクトはタスクを考慮して博物館が独自に決定したクレジット数を割り当てている。

3つの科目群から各4クレジット以上を取得し、成績基準をクリアし、プレゼンテーションを含む最終面談に合格した学生を、ミュージアムマイスターに認定する。平成 26 年 4 月末時点の登録者数は 141 名、これまでにミュージアムマイスター認定を受けた学生は 23 名（理学部・文学部各 5 名、教育学部・農学部・工学部・水産学部各 1 名、理学院 4 名、文学研究科 2 名、農学院・環境科学院・生命科学院各 1 名）である。

ミュージアムマイスター認定コースの特徴

コースの特徴は、社会体験型科目によく表れている。たとえば、学生が北大総合博物館の課題を見出してそれを解決するためのプロジェクトを企画・実施・評価する授業、ミュージアムグッズを企画開発して評価する授業、博物館をテーマとした1分間の映像を制作する授業がある。企画展の展示解説、セミナーの運営、卒論ポスター発表会での発表と運営など、授業枠外のプロジェクトもある。

いずれも博物館来館者を意識した取り組みであり、来館者と実際に接する場面が多いことは社会体験型科目の特徴である。学生はまず大学博物館の社会での役割を考察し、来館者を知り、大学博物館と来館者を媒介する自分達の役割を意識しながら活動を進めていく。展示解説や卒論ポスター発表会では、実際に来館者に展示内容や自身の研究内容を伝え、質疑応答することで、コミュニケーション能



卒論ポスター発表会

力を身に付けていく。

グループワークの要素を取り込んでいることも、社会体験型科目の特徴である。ポスター発表という個人的な活動に終始しかねない取り組みについても、発表者を集めて中間報告会や質疑応答のリハーサル時間を設け、博物館教職員が指導し、さまざまな学部の発表者が互いにアドバイスする。そしてコースの授業枠外のプロジェクトとして発表会を運営する学生も参加して助言する。そこでは、来館者に説明するために研究を見直し、他分野学生からの刺激を受けてポスターを改訂していくだけでなく、他分野の学生に対して適切な意見を述べる術を学び、他の学部・研究室の研究内容を知り視野を広げる機会となる。

更に、評価の視点を取り入れていることも社会体験型科目の特徴である。学生企画プロジェクトでは、来館者調査に基づいた企画を博物館会議で提案し、質疑応答をした上で実施が認可され、実施後には博物館会議で企画の評価結果を含めた報告を行う。その評価とは、ワークショップを開催した場合にはその参加者への質問紙調査、参与観察、メディア報道の数や内容、参加者から後日届く質問紙調査以外の感想など波及効果について総合的に分析する。グッズ制作については、売上実績だけではなく、来店者に購入した理由・購

入しなかった理由などを問う面接調査を行い、分析する。他の取り組みについても、活動を振り返る最終レポートが課される。

ミュージアムマイスター認定コースの意義

コースは北海道大学の学生全体を対象とし、本学が目指す全人教育の一環として実施している。ミュージアムマイスターの資質として設定した上記の能力は、学芸員にならなくとも、社会のさまざまな場面で必要とされるものである。学生の事後考察レポートを読んだり、学生の変化を追って観察すると、意図した能力を身に付ける機会になっていることがうかがえる。たとえば、卒論ポスター発表会参加者は次のように一連の取り組みを意味づけた。「準備期間と2日間の発表を経て私が経験したことは、適切に人に伝えると、自分に返ってくるということである。まずポスターの制作においては、ポスターに載せる情報が限られており、情報の正確さを保ちながら研究内容の大筋とそれ以外を判別する作業が最も困難であった。その点では、他分野の学生や教員にポスターを見ていただく中で、気が付かなかった情報の過不足を意識しながら制作することができた。当日は、多くの方々が考察に関する意見や質問をいくつも述べてくださった。質問は、相手のわからない点だけでなく相手が理解している点も知ることができる。適切な回答をすると驚くほど話が発展していくことが分かった。研究は、目的に向かって様々な視点から切り込むものであると思う。お互いの考えを応答しあう中で、対象物を中心に発展していく。これまでは、博物館の展示解説など他の研究者の研究を中心に交流してきたが、自分の研究を中心におくことで、多様な視点を共有でき、直接研究に反映させられることが一番の成果であった。」

卒論ポスター発表会は、学部を横断した活動を展開できる大学博物館が主催すべき取り組みとして、来館者や発表者の指導教員だけでなく、他学部の研究を知りたいとする教職員、これから卒業研究に取り組む下級生などから高い評価を受けている。また、発表会の運営を学生達が担う点も各方面から評価されている。



鈴木章名 名誉教授と、イベントの司会を務めたミュージアムマイスター

ミュージアムマイスター認定コースの課題

コースの課題として、教育 GP として展開していた当時、学内外への周知が不十分であることが挙げられた。平成 23 年度よりコースを説明する冊子を学部 1 年生全員に配布しているが、登録者数は急激に増えてはいない。しかし、ミュージアムマイスターに認定された学生には、ノーベル化学賞を受賞した鈴木章名誉教授と北海道知事と道内の児童らとの実験交流イベントの司会進行を務めるなど他学生では経験できない活躍の場を用意しており、その活躍がマスメディアで報道されたり、博物館ホームページや Facebook、ニューズレター、ポスターで周知したり、授業中に紹介することを通して、彼らに憧れを抱き、登録後に熱心に取り組むを続ける学生が確実に増えた。

授業枠外のプロジェクトでは、学生の活動日程の調整が困難であり、一堂に会せずに数名ずつあるいは個別の指導となる場合も多い。プロジェクトを主に指導する教員 2 名と、教員をサポートし学生にアドバイスする研究支援スタッフ 2 名の体制の充実が課題である。

大学博物館を活用した教育プログラム「一日山大生になろう！」について

山形大学附属博物館 学芸研究員 佐藤 琴

はじめに

山形大学附属博物館は大学博物館のなかでも長い歴史を持つ博物館の 1 つである。山形大学は、山形県下にあった旧制の山形高等学校、山形師範学校、山形青年師範学校、米沢工業専門学校、山形県立農林専門学校の 5 校を母体として、昭和 24 (1949) 年 5 月に新制国立大学として設立した。それからさほど下らない時期に、師範学校に設置されていた「郷土室」を引き継ぎ発足した（年月日不詳）ものと推測される。なぜならば、博物館法（昭和 26 (1951) 年）の制定を受けて、昭和 27 (1952) 年に初めて行われた「博物館に相当する施設の指定」の一覧に当博物館の名称が記載され

展望

学生のなかには認定に必要なクレジット数を遥かに超えて授業やプロジェクトに参加したり、博物館のボランティア活動に加入したり、授業から生まれた博物館サークルで活躍する者もいる。今後も博物館と継続した関係を結ぶ学生を更に増やしていきたい。また、在校中のミュージアムマイスターも多いことから、ロールモデルとなる彼らと学生とが交流する場をより意識して用意し、卒業したミュージアムマイスターについては社会人としての活躍を追跡調査したいと考えている。

そして、全人教育の一環である本コースでは、社会に出て役立つスキルを身に付ける以上の経験をしてほしいと考えている。学生発案型企画プロジェクトに取り組んだ学生は、「達成感や結果の他にも、受講経験を通して自分自身を知ることができたことや、最高の仲間を得たことはまさに財産である」とコメントした。自分の弱みと強みを理解し、他者のよい点を認め、グループワークのなかで自分を成長させていく。自分の可能性を広げ、かけがえのない体験ができる教育の場を博物館から提供していきたい。

ているからである。少なく見積もっても、当博物館の歴史は 60 年を越えている。

当博物館は人文系・自然史系の資料をおよそ 3 万点収蔵する総合博物館である。なかでも、近世地方文書はこの資料がなければ山形県の歴史を記述する事はできないとまで言われるほど充実している。これらの古文書については近年も寄贈・寄託が相次いでおり、総数は 6 万点を越える見通しである。にもかかわらず、当博物館は独自のスペースを持たない。現在は山形大学小白川図書館の 3 階の一角を間借りしている。およそ 400 m²の空間だが、膨大な資料を良好な状態で保管できているとは言いがたい部分がある。この状況を打開するために、再三博物館スペースの拡充を要求してきたが、実を結ぶことはなかった。

ところが、平成 25 (2013) 年 1 月、人文学部 1 号館の耐震改修工事に伴い増築工事が行われることとなり、その 1 階部分に博物館を移

設することが決定された。博物館職員にとっては寝耳に水の話であり、展示室、収蔵庫などの面積の割り振りや動線計画なども我々の意向は一切聴取されることなくプランは出来上がっていた。しかし、この機を逃しては来館者が訪れやすい1階に降りることも、スペースを増やすこともできない。移設決定後は、積極的に博物館側の意向を表明し、大学の顔として相応しい施設とするために建築プランの修正を行い、新しい展示室の準備などを進めているところである。施設が拡充されれば、職員と運営費の増強も必要となる。しかし、博物館側からは何度も要求を上げているにも関わらず、上層部の反応はない。この状況を打開する1つの策として、大学博物館を活用した教育プログラムに参加することとした。

目的と経緯

山形大学は毎年マニフェストを掲げ、その達成に向けた事業を各種実施している。そのうち、「大学の「知」の資源を有機的に活用した教育プログラム」の開発を担当する部署が博物館に事業への参加を要請してきた。なぜなら、博物館は社会教育施設として地域住民に親しまれており、すでに他の教育機関との連携に関するノウハウと実績を有していると評価されたからである。これは博物館の存在意義を学内外に示す良い機会であると捉え、事業に参画することとした。そして、発表者が企画運営を、博物館業務を支援する教員2名が体験学習の講師を担当し、平成25(2013)年3月に教育プログラムのプロトタイプとして「一日山大生になろう!」を実施した。

本事業の特色は対象を中学生に限定したことである。これまで大学が実施してきた対外的な事業は進学を控えた高校生と体験学習が効果を上げる小学生を主な対象としてきた。そもそも当博物館に限らず中学生の博物館利用は少ない。これは放課後や週末などの博物館利用に活用されるべき時間帯が部活動や塾などですでに埋まっているためである。しかし、高校生ほど進路選択が切迫しておらず、また、小学生よりも学問に自主的に取り組む力がある中学生こそが、大学のリソースを活用した新たな教育プログラムを開発する対象

として相応しいと判断した。このため、プログラムの立案だけでなく、参加者をどう集めるかという点も大きな課題となった。

事業概要

タイムテーブル

- 9:30 入学式
- 10:00 理系体験「まだ名前がない山形の生き物を見てみよう」電子顕微鏡の操作・観察体験
- 12:00 学食体験
- 13:00 文系体験「むかしのお金を作ってみよう～日本人のお金のルーツを探る～」
「和同開珎」鋳造体験
- 14:30 修了式

投入したノウハウ

○広報と募集

- ・博物館スタッフが中学生向けの明るく親しみやすいチラシをデザインした。
- ・大学周辺の中学生一人一人に手渡すためにチラシを1クラスの数毎に仕分けし、中学校の事務室に持参して配布を依頼した。

明るく親しみやすいチラシ

○体験の満足度を上げる工夫

- ・年齢が近い話し相手がいるとリラックスできるため、体験補助に学生スタッフを配置した。
- ・昼食は学食体験を実施した。食に対する興味関心は高いと考えたからである。
- ・お土産を用意した。理系体験では利用者が撮影した電子顕微鏡の写真。文系体験では鋳造した「和同開珎」にビーズや紐などをつけてストラップにし、情報を記載した台紙とともにビニル袋に入れて持ち帰れるようにした。

事業を実施して

○参加者募集

定員 10 名に対し応募 10 名（当日 3 名欠席）。参加者アンケートによれば参加を決めた理由はチラシであった。チラシ制作費は約 7 万円（デザイン費無償）と高額であったが、手間暇とコストを費やしたからこそその結果である。

○事業の評価

アンケートによれば参加者の満足度は高かった。単に「楽しい」という感想だけでなく、体験意図を理解し、さらに興味関心が広がったなどと記されており、事業の企画意図が伝わったことがわかった。担当教員や学生スタッフも参加者の積極的な反応を引き出したことで達成感を得た。他には、地域住民（中学生）の山形大学に対する興味・関心が少なくはないことも確認できた。

まとめ

本事業の実施を通して筆者が念頭に置いていたのは「大学博物館の役割」である。高度



修了式後の記念撮影

経済成長期の公立博物館建設ブーム以前から存在している当博物館は長年「地域文化の伝承館」を標榜し活動してきた。その活動は今後も継続していくが、これまで蓄積してきた資料とノウハウを活かし、地域博物館とは異なる、大学ならではの情報を発信することも使命であると再認識した。

対象人数が 10 人たらずの教育プログラムは、博物館の新築移転に向けて、その存在意義を大学内外にアピールするためには迂遠な活動だと思われるかもしれない。しかし、天からお金が降ってくるような奇跡を望むよりも、この博物館があって良かったと言う人々を大学内外に着実に増やしていく方が将来的には博物館を支える基盤となるであろう。

今後とも博物館資料を活用し、博物館担当教員のみならず他の教職員との連携を強化し、学生の参加を促しながら、博物館活動を積極的に行っていくことで、新たに建設される博物館の拡充をはかっていきたい。

大阪大学総合学術博物館における学芸員養成の取り組み

大阪大学総合学術博物館
特任講師 松永和浩

はじめに

2012 年 4 月から改正博物館法が施行され、学芸員養成課程は 8 科目 13 単位から 9 科目 19 単位へと拡充された。大阪大学では 2010 年度から新課程に対応してきた。本報告では、改

正法前後の本学の学芸員養成課程を概観し、それについての大阪大学総合学術博物館の取り組みを紹介したい。

基礎セミナー「博物館体験コース」

本学の学芸員資格認定科目は全学部の学生が受講可能であるが、全て文学部で開講されている。本館は法改正を機に、2010 年度から学内実習を文学部とともに分担することとなった。だがそれ以前から本館では、1 年生対象の一般教養課程である基礎セミナー「博物



模擬展覧会の展示解説

シの作成、パネル・キャプションの作成・設置、列品・ライティングまでをこなして展示を完成させる。さらには展示解説を行い、これに質疑応答・講評を加える。限られた時間のなかでもこれまで未完に終わったことはなく、明確なコンセプト、巧みなケースの配置、参加型の展示の工夫など、趣向を凝らした模擬展示もなかには見られる。

学内実習を担当することで本館が得たメリットとして、次の四点が挙げられる。一つは、実習の担当者として、2010年度に助教一名を任期付きではあるが増員できたことである。次に、学内資金（2011年度教育研究等重点推進経費）を獲得し、必要な物品を購入できたことである。主なものはノートパソコン・カラー複合機・大判プリンター・マイクロリーダーで、資料調査・整理やパネル・ポスター作成等、実習以外の日常業務でも大いに活用している。三つ目は、本館の展覧会の見学レポートを課し、入館者増に寄与していることである。本館の入館者の階層は60歳以上が最も多く、高校生・大学生が最も少ないという構成となっており、学内のリピーター獲得につながるものと期待される。最後は、レポートの代替措置として展覧会のミュージアムトークを課していることで、プレゼン能力の涵養といった教育効果を高めるとともに、来館者へのサービス向上にも貢献している。

その一方で、課題も少なくない。模擬展示で最も惜しまれるのは、完成したその日に撤去しなければならないことである。近隣の関西大学博物館が博物館実習展を毎年開催して一定の成果を上げていることを鑑みるに、本

【B-1班】大阪環状線開通50周年「浪花百景 ～環状線を時間旅行～」



模擬展覧会をウェブ上で公開

館でも是非とも実施したいものである。だが受講生は毎年40～50名に上るため、実現は難しい。1展示1班で人数を5、6人すると、8班ができあがるが、展示室の構造では4班の展示が限界である。日程を二つに分けて実施せざるを得ないため、公開しようとするれば後半の模擬展示のみとなり、公平性を欠くことになる。それでも2014年2月の本館ホームページ改訂にともない、ウェブ上での公開という形にこぎ着けることができた。「阪大生がつくった展覧会」(http://www.museum.osaka-u.ac.jp/feature/museum_practice/)というページを設け、展示風景・チラシを紹介しているので参照されたい。

もう一つの課題は、文学部の学生をメインターゲットとして、全学的な受入体制が不十分な点である。具体的にいうと、文学部での開講という法改正以前からの形態の継続、理系の実習内容の欠如という問題である。現状、受講生の構成からすれば問題ないが、将来的には解決すべきと考える。前述の「博物館体験コース」の蓄積が、来るべき文理を網羅した学内実習の実現に資するものと期待される。

全学的な学芸員養成課程の体制づくりに、本館の果たすべき役割は決して小さくない。それにはマンパワー不足、各部局との調整・協力など、様々な課題が横たわっている。館運営との一体的・効率的運用を図りつつ、将来的な課題を見据えながら、今後も学芸員養成に取り組んでいきたい。

標本収蔵室での眠りからさめた クニマス ―大学で学術標本を持ち 続けることの大切さ―

京都大学総合博物館 教授 中坊徹次

京都大学総合博物館地下の液浸標本収蔵室には川村多實二博士（当時京都帝国大学教授）が大正時代に集められた淡水生物コレクションがある。その中の9個体の田沢湖産クニマスの標本が山梨県西湖でのクニマス発見を呼び込んだ。クニマスは田沢湖固有のサケ科サケ属の一種であるが、戦前に絶滅した。しかし、絶滅前にいくつかの湖に移植されており、そのひとつ山梨県西湖で、クニマスとは思われずに生きていたのである。この発見は採集されてから90数年のあいだ標本収蔵室で眠っていた田沢湖産標本に始まる。

2003年秋、田沢湖産クニマス標本を閲覧するために来館した杉山秀樹氏（当時秋田県水産振興センター）に『クニマス百科』をいただいた。この本にはクニマスは黒い魚であると強調されていたが、その他にクニマスが9月頃には水深約100～200m、2月頃は水深約40～50mで産卵していたこと（要約）が記されていた。産卵期に黒くなるサケ属の魚は他にもいる。しかし、湖のこんな深い場所での産卵はサケ属の魚では考えられない。サケ属の魚はほとんどが川の浅瀬で産卵する。湖で産卵するヒメマスでも水深15mより浅い湖岸で産卵する。クニマスの産卵場所はサケ属の他の魚と比べて異様に深い。この特性への強い関心が私とクニマスとのなれそめであった。

クニマスは田沢湖で進化したのだろうか。それとも、このような特性をもった魚が田沢湖に閉じ込められて残ったのだろうか。サケ属の魚が分布する北太平洋沿岸の地図を見ながら考えたのだが、クニマスは17個体の標本しか残っていない。この魚の戦前の生物学的知見は断片的でサケ属の他の魚と比較して論じられる程のものが無い。研究したくても天を仰ぐしかなかった。

京都大学の所蔵標本は雄7個体、雌2個体と雌雄がそろっている。これでCG（コンピュータグラフィックス）を作成しクニマスを泳

がすことが出来ないだろうか。そうすれば、展示に使えるし、絶滅したクニマスの遊泳もみられる。そして、CGを田沢湖で公開できれば、ふるさとのアピールにもなると僭越なことを考えたのだが、博物館で展示を担当した経験からの発想であった。クニマスを生きた姿で泳がせるためには体色を再現しなければならない。「黒」といっても単純ではなく実際に見たことのある人でないとわからない。田沢湖には戦前にクニマスをご覧になった方々がおられる。この方々に教えていただかないとクニマスの体色は再現できない。現地での取材も含めてCG作成にはかなりの費用がかかるので、2003年の暮れごろから折を見て放送関係の方に作成をお願いすることを始めた。

京都大学総合博物館では2005年の秋季企画展として「日本の動物はいつどこからきたのかー動物地理学の挑戦」を行った。このときに田沢湖産クニマス標本も展示したが、CGでの映像は実現できなかった。その後も、何人かをお願いをしたのだが、どなたも受けてくださらず、時がたち、田沢湖ではクニマスの体色をご存知の方が少なくなってきた。苦肉の策として絵による体色復元を試みたところ、はからずも2010年3月に本物が出てきたのである。

私の手元に来たのは2個体の20センチほどの小さな黒いマス、すぐにはヒメマスに似ているということしかわからなかった。しかし、採集地を聞いてみるとクニマスが昭和10年に移植されたことで知られている山梨県西湖。2個体とも尾鰭が破損、産卵中に採捕された雄であった。3月に産卵するヒメマスはいない。



写真1. 大正時代の田沢湖産クニマス
（上は雄、下は雌；FAKU-P 280）



写真2. 2010年3月西湖産クニマス（雄、FAKU 97737）



写真3. 2011年5月西湖産クニマス（雄、FAKU 98839）

まさか、と思いつつ、電話で採捕した漁師さんに網を仕掛けた深さを聞くと水深30～40mの湖底であった。サケ属の魚にしては深い。クニマスの生態に合う。もしかしたらと思ったが、京大の田沢湖産クニマスは9個体とも、およそ30センチ、雄は少し吻が変形しており産卵期の形態をとりはじめた状態を示している（写真1）。それに比べて西湖産のものは小さく、頭部の雰囲気も異なっている（写真2）。黒いマスはワカサギをとる網にかかったのがあった。漁師さんによれば網をかけられるのはあと数日だということだったので、黒いマスのことはいったん棚の上にあげた。わずか2個体では何も言えないのである。来年に回そうと思ったが、だめでもともとである。漁師さんに黒いマスが採れたら研究室に送っていただけませんか、とお願いをしてみた。そうしたら翌日に採れたから送るという電話がかかってきた。届いた箱には黒いマスの雌3個体と雄1個体が入っていた。比較的大きな雌のお腹には50個ほどの黄色い成熟卵が残っていた。ヒメマスの卵は橙色である。クニマスの卵は黄色と書かれていた。これも一致する。ここで黒いマス研究のスイッチが入った。特別採捕の許可を得て、4月初めに西湖に行き、黒いマスは9個体になった。多くはないが、これで研究を始めたのである。

解剖を要する形態的特徴を観察したところ、黒いマスはクニマスと一致していることがわかった。これが2010年4月末、驚きであった。しかし、もうひとつ大切なことを調べなければならない。7月末、遺伝子分析により黒いマスはヒメマスとは交雑していないということが明らかになった。黒いマスはクニマスであった。絶滅魚は生きていたのである。

2010年12月にこの結果を公にしたあと、2011年1月に「クニマス速報展」を行い、発見時の9個体と田沢湖産9個体を展示して一般に公開した。その後、西湖産クニマスは西湖畔と田沢湖畔で展示され、山梨県や秋田県の人々にも見ていただいた。その後、西湖の方々の協力で、クニマス研究が進み、典型的な特徴をもったクニマスが採捕された（写真3）。これらの標本は2012年の秋に「クニマスと共に一過去から未来へ」という特別展で一般の方々に見ていただいた（写真4）。

西湖に加えて田沢湖のクニマスも研究に用い、研究論文はすでに4報になる。使用した標本はすべて後世の研究に資するために総合博物館の液浸標本室で保管されている。クニマスは眠りからさめて標本の数を増やしたのである。こんな信じられないことが起こったのだが、田沢湖産クニマスの標本は自らが生存していることを知らせただけではなく、学術標本を保管することの大切さも教えてくれたのだと思う。



写真4. 2012年秋特別展
「クニマスと共に一過去から未来へ」

大学博物館等協議会加盟館の 活動状況

北海道大学総合博物館

夏季企画展示

学船 洋上のキャンパスおしよる丸

北海道大学総合博物館分館 水産科学館

2014年5月20日(火)～6月27日(金)

北海道大学総合博物館

2014年7月11日(金)～11月3日(月・祝)

企画展示

三岸好太郎と札幌の山

—三岸好太郎作《北海道風景(大通公園)》

(筑波大学所蔵)をめぐって—

平成26年9月6日(土)～平成26年9月28日(日)

主催：北海道大学総合博物館・筑波大学芸術系

東北大学総合学術博物館

SMMA クロスイベント

地底の森ミュージアム×東北大学総合学術博物館×みちのく博物楽団

みんなでどろんこ！生きもの観察 in 地底の森

地底の森ミュージアムに隣接する古代米の田んぼや野外展示「氷河期の森」で生きものを採集してじっくりと観察します。わたしたちの住んでいる場所に見えなかったもうひとつの世界があること、富沢という土地の環境が2万年前から現在までつながっていることを楽しみながら学びます。

第1回：2014年7月13日(日) 9:30～12:00

古代米水田にて

第2回：2014年9月15日(月・祝) 9:30～

12:00 「氷河期の森」にて

定員：各回40名

申込：往復はがき、FAX、E-mailにて申込期間中に地底の森ミュージアムまで

申込期間：第1回6月29日必着、第2回8月30日必着

申込・問合せ：地底の森ミュージアム

〒982-0012 仙台市太白区長町南4丁目3-1

TEL: 022-246-9153 FAX: 022-246-9158

E-Mail: t-forest@coral.ocn.ne.jp

新潟大学旭町学術資料展示館

佐渡金銀山に関わる絵巻・浮世絵・模型展

2014年4月16日～6月1日

新潟大学旭町学術資料展示館

災害の記憶(仮)

2014年7月2日～8月24日

新潟大学旭町学術資料展示館

新潟のジオパーク展 —糸魚川と佐渡の魅力—

2014年7月12日～8月29日

新潟大学駅南キャンパス ときめいと

金沢大学資料館

新歓展

学生たちの肖像—前身校の学生写真・制服—

同時開催 新収蔵品展

2014年4月4日(金)～6月27日(金)

企画展①

Art Museum?

—金沢大学のアート・リソース—(仮)

2014年7月9日(水)～9月26日(金)

特別展

超然—第四高等学校の校風と学生たち—(仮)

2014年10月中旬～11月下旬



城内写真展

よみがえる城内キャンパス

2014年10月27日(月)～11月7日(金)

企画展②

城内発掘資料(仮)

2014年12月上旬～2015年3月下旬

東京藝術大学大学美術館

観音の里の祈りとくらし展

一びわ湖・長浜のホトケたち—

2014年3月21日(金・祝)～4月13日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

藝大コレクション展—春の名品選—

2014年3月21日(金・祝)～4月13日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

東日本大震災復興祈念・新潟県中越地震復興10年 法隆寺—祈りとかたち

2014年4月26日(土)～6月22日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

第2回国際木版画会議特別企画展 木版ぞめき—日本でなにが起こったか—

2014年8月30日(土)～9月14日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

台湾の油彩画・東京美術学校の卒業生たち(仮)

2014年9月12日(金)～10月26日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

河北秀也教授退任展(仮)

2014年11月13日(木)～11月26日(水)

東京藝術大学大学美術館本館

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

2014年12月18日(木)～12月25日(木)

東京藝術大学大学美術館本館

東谷武美教授退任展(仮)

2015年1月5日(月)～1月15日(木)

東京藝術大学大学美術館陳列館

東京藝術大学卒業・修了作品展

2015年1月26日(月)～1月31日(土)

東京藝術大学大学美術館本館、東京藝術大学構内、東京都美術館

大阪大学総合学術博物館

特別展

漢方今昔物語

生薬国産化のキーテクノロジー

2014年4月26日～7月19日

夏期特集展

奇跡の古代鰐・マチカネワニ

—発見50年の軌跡—

2014年7月26日～8月30日

企画展

魅惑の美 Crystal

—最先端科学が拓く新しい結晶の魅力—(仮)

平成26年10月中旬～1月中旬

マチカネワニ発見50周年記念事業

大阪大学シンポジウム

マチカネワニ・サミット2014(仮)

2014年11月16日

国立民族学博物館

特別展

国立民族学博物館創設40周年記念

日本文化人類学会50周年記念

イメージの力

—国立民族学博物館コレクションにさぐる

2014年9月11日(木)～12月9日(火)



金沢大学資料館 新歓展



大阪大学総合学術博物館 特別展



大阪大学総合学術博物館
夏季特集展・シンポジウム



国立民族学博物館

特別展



企画展



愛媛大学ミュージアム



企画展

国立民族学博物館創設 40 周年記念

みんぱくおもちゃ博覧会

—大阪府指定有形民俗文化財

『時代玩具コレクション』

2014 年 5 月 15 日（木）～8 月 5 日（火）

愛媛大学ミュージアム

愛媛大学蔵 三輪田米山名品展

2014 年 4 月 2 日～8 月 3 日

主催：教育学部、図書館、ミュージアム
第 2 常設展示室

この度、愛媛大学ミュージアムの第 2 常設展示室の壁面ケースの新調に合わせ、図書館所蔵作品を一堂に展示することになりました。愛媛大学の収蔵品は、『米山日記』以外に屏風の作品があります。展示作品の多様性を持たせるために、個人所蔵の初公開作品を加えさせて頂き、小字から大字まで多様な作品を展示致します。米山作品の幅の広さとスケールの大きさをお楽しみ下さい。

恐竜物語から飛び出た生命

—中生代の生命世界展—

2014 年 5 月 14 日～7 月 31 日

主催：愛媛大学大学院理工学研究科地球進化学、ミュージアム 協賛：愛媛大学校友会
会場：企画展示室、多目的ルーム

学術研究の公開を軸にした新たな形での展示として、中生代の生物を中心に恐竜まんが書籍より四話分と学内学術研究とのタイアップを実現させる。まんがによる表現世界と実物資料を含めた展示資料とが融合した展示を実現させることで、来館者

の皆様に学術内容を、より楽しく・より興味を持って頂ける展示となるよう希望するものである。

鹿児島大学総合研究博物館

特別展

現代によみがえる生き物たち

—種子島にゾウがいた頃—（巡回展）

2014 年 8 月 25 日（月）～8 月 30 日（土）

鹿児島大学附属中央図書館

2014 年 9 月 4 日（木）～9 月 15 日（月）

鹿児島県立博物館企画展示室

2014 年 9 月 26 日（金）～10 月 25 日（土）

種子島総合開発センター「鉄砲館」

種子島西之表市住吉、形之山から産出したゾウや魚類、植物など保存の良い化石を多数展示し、更新世の種子島と周辺海域の古環境を再現します。形之山の化石群が本土で公開されるのはこれが初めてです。

市民講座

現代によみがえる 130 万年前の

種子島の生き物たち

2014 年 9 月 14 日（日）14：00-15：30

鹿児島市中央公民館 3 階

講師：大塚裕之（元鹿児島大学総合研究博物館長）

自然体験ツアー

種子島で化石にふれる

2014 年 9 月下旬頃

案内者：大塚裕之・鹿野和彦・内村公大

MUSEO ACADEMIAE 第 16 号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日 2014 年 6 月 19 日
大学博物館等協議会
編集 鹿児島大学総合研究博物館 099-285-8141
890-0065 鹿児島市都元 1-21-30